

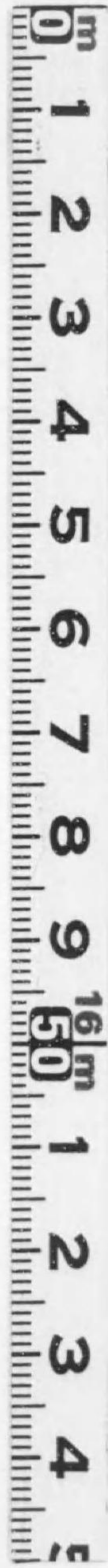
特115

761

五年七月二十日印刷納本  
五年七月二十三日發行

哲学。ハンフレット

第二輯



始







特15  
761

眞

理

と

理

性

大正  
15. 7. 31  
内交

*Faint handwritten text, possibly a signature or title, written vertically in cursive script.*



## 眞理と理性

### 第十講

吾々人間は、かく生きて居る間は、始終色々の自然現象と交渉し、又外の人間と交渉する。然も是等の交渉間に於て、單に、それ等の現象を受動的に感覺し經驗するだけでなく、自ら發動的に、それ等の現象に干與する。

即ち、自然現象と人事現象との二つの間に、人間は生きて居るのである。

此の人間對現象の關係に於て、昔から人間に最も必要とされて居たことは、是等の現象の眞相を捕捉することであつた。

大昔の人間でも、晝は明るく、夕方になるに随つてだんだん薄暗くなり、夜は全く闇くなり、かうして晝と夜とが交互に續いて止む時がないと云ふ事を知つて居た。その間に、人間は、食ひたい、飲みたい、生きたい、と云ふことを感じ、食ふ爲には働き、働いては憩ひもした。それが爲めには晝の明るい中に働いて、夜は憩む方



がよいといふ様な事なども思ひ知つた。

是は人間が、自然現象と交渉する間に知つた一例に過ぎないが、かくの如くして人間は、種々なる自然現象の關係を知り、漸次、それに順應して生きて行く事を知つて來た。

又人事現象に於ても、他人から親切にさるれば、愉快に感じ、害さるれば不快に思ふ。と同様に、自分も親切にすれば、他人が喜び、害すれば、憤ることは心的現象の眞相であると知つた。そしてお互に親切にすれば睦しくなり、其の社會は繁榮し、反對にお互が害しあへば社會は衰頽するといふ事實も觀た。そこで、社會には社交上、ある規則が必要だと考へるに至つた。

人間は是等の、自然現象、社會現象の眞相を、なるべく正確に、且つなるべく多く覺え、なるべくよく順應することを知れば、それだけ人間生活に便宜を得、安全であることをも知つて來た。是は吾々人類の經驗し直觀して來た事であり、隨てま

た吾々の常識となつてゐるのである。

此の常識が更に進んで、現象の眞相を正確に知ることが、生活上最もよいと云ふ考を起すものも出て來た。

もし、かくの如き現象の眞相を正確に獲む事が出來たら、それこそ文字通り眞<sup>まこと</sup>の相である、そして、之にくらべれば、常識で眞相と思つて居たことは、實は眞相ではなく、それに似た或るものに過ぎないといふことになるわけである。かくいて、事物の眞相を得たい、といふ慾望が人類の一部に盛に起つた。

果してかくの如き、眞のものを人間が認め得るかどうか。是は大問題であり、種々議論がある。然し認め得るかどうかは不明でも、眞のものがあつたといふことだけは、古來常識ある人々の肯定してゐたことである。



故に此の眞のものがあるといふことは、何處の國でも考へられて居たものである例へば日本語では、マコト、支那語では、道、佛教では、眞如、阿頼耶識、英語では、Truthトールス、獨逸語では、Wahrheitツールハイト等は全體それを表したもので要するに、今日の日本語の、眞理といふ言葉に相當し、少しの誤りのない、眞實のものである、と云ふことである。

若し果して眞理(Wahrheit)といふものがあるならば、それは眞のものであるが故に、何人も是を争ふことの出来ぬものであり、随つて絶対的の權威でなければならぬ。

かゝる以上、眞理は必ず次の二つの條件を備へなければならぬ譯である。

一、事實であること。  
吾々人間は、想像によつて、事實に非ざることも考へることが出来る。しかし

眞理は、眞に事實としてあるものでなければならぬ。事實でないものならば、その存在は決して證明せらるべき筈はない。随つて、總ての人から權威と認められる譯もないからである。

事實は、探し求めねばならぬ。

人間が之を創り出すことは出来ない。即ち創造は眞理に有り得ない。眞理は單に探し求めて發見するより外ないのである。

二、不變的に存在するものであること。

事實には變化する事實もあるが、そらういふ變化するものは、總ての人間に客觀的同一の價値を有することは出来ない。總ての人間に客觀的同一價値を有するものでなければ總ての人間に對する權威たることはできない。故に眞理は、永久的に不變的に存在して、同一の價値を持続する事實でなければならぬ。



前に真理とは不變的事實であるといふことを述べたが、それだけでは真理の形態がよくわからぬ。吾々はもつと判然としたものを知らねばならぬ。

さて、いかにして之を知るべきか。真理は人間界に於ける絶對的權威だとすればそれは人間に依て、認めらるゝものであるか、もしくは其の認めんとする努力の對象となるべきものでなければならぬ。

それ故に、若し人間に、真理の形態をもつと明かにすることが、出来るならば、それは、事物認知に關する人間の諸心力を點檢し、其の認めらるゝ所の對象の種類及び認める力の正確力を比較對照する間に成功せねばならぬ筈である。何となれば其の機會に於て、人間の心力と真理との關係が明かになり、隨つて真理の姿が一層明瞭となるであらうから。

人間はいろいろの事物の存在を認める爲めに、種々の心力を有つてゐる。それは感覺、意識、經驗、直觀、理性である。

此機會に於て、特に注意して置かねばならぬことは、術語の意義に關してである。哲學上、學者の用ふる術語の意義は、同一語に關しては、或る共通點又は類似點をもつてゐるのが普通であらけれども、嚴格な意味に於て、同一に用ひらるゝ場合は、殆んどないといつてよい。例へば哲學といつても、真理といつても、理性といつても、經驗といつても、意識といつても、學者によつて、多くか少くかの程度に於て、それぞれ違つた意味に用ひられてゐる。故に或る學說に對する者は、先づ其内に用ひられてゐる術語の意義をたしかめねばならない。甲學者の與へた意義を以て、乙學者の術語に對するならば、乙學者の思想を正しく理解することは出来ない。我國の哲學者の論文の難解と稱せらるゝ、主因は、事柄其れ自體の難解なるよりは、矢鮮に歐米諸學者の說を引用する爲めに、各學者によつて別々の意味に用ひられた同一術語が、何等の區別なきもの、如く無造作に綴り込まれ、讀者を混亂せしむる爲めではないかと思はれる。

それ故に、私は斷つて置くのである。私の講義に用ひる術語は、其の何處に用ひらるゝとも、終始一貫、私の與へた意義に於てのみ解釋されなければならない。他の學者が術語に與へた各種の意義を考へて私の思想に對するならば、必ず誤解に陥るであらう。



第一、感。覺。(Empfindung)

感覺は物質的現象を一時的に認める力である。普通、五感と言つて、味覺、視覺、嗅覺、聽覺、觸覺、を擧げるが、觸覺の代りに、壓覺、冷熱覺、痛覺の三感となし、都合七感とする方が適當であらう。是等の感覺によつて、人間は外界の理學的現象、又は體內の生理的現象を各現在の瞬間に於て認める。長い間に於ける物質的現象を認めることは、最早感覺の仕事外に屬する。それは後に述べる經驗の仕事になるのである。

第二、意。識。(Bewusstsein)

意識とは活動中に在る人間が各現在に於て自己及自己の心作用を認める事である。活動してゐても、自分の存在も自分の心作用も認めぬ所には、意識はない。自分を認めるとは、現在の自分に過去の自分と、將來の自分とを結びつけることである。自己意識のある所には必ず過去をもつた所の自己、而して同時に未來をもつべき自己であるといふ觀念が伴ふ。此の觀念を伴はなければ意識的の自己は

なし。

而して意識は、自己を認むると同時に各現在に於ける自己の智、情、意等のいろいろな心作用を認めることであるから、要するに、意識とは、自分の現在の心的活動を、自分の過去の閱歷ならびに將來の生活に關する觀念に結びつけることである。この結合がなければ、心的活動があつても、無意識的である。衝動的である。意識は、自己の心内の現象を認むる點に於て感覺と違ふけれども、其の各現在に於て、一時的に認める點に於て、感覺と同じである。

第三、經。驗。(Erfahrung)

是は、繼續し又は屢々反覆する所の、心外及び心内の現象を永い間又は廣い範圍に亘つて認める心の力である。故に、經驗は、言ひ換へれば、感覺、意識及び次に述べる直觀Aによつて、各時間點に認めた現象に對する觀念を、長時間に亘つて蒐集することである。これを觀察、實驗、統計的調査、歴史的觀察等に分類することが出来る。



## 第四、直観(Intuition)

人間は自分の心の内の各現在の作用は、直接に意識で之を認める。また其の永い間の事は経験で認め得る。併し、他人の心内の作用は意識では判らない。唯その人の言語、舉動、身振、表情等を感覺し、経験して自己の心作用が自己の肉體に影響する状態に比較、對照して、推測して認めるより外はないのである。斯くして他人の心現象を推測的に認める力が即ち、一種の直観である。

また、人間は、経験によつて物質現象の變化を認むると同時に、漠然ながら、其の物質にこもれる力の現象、たとへば、電力とか、磁石とか、動植物の生活力などを認めることがある。是等の力の存在は、感覺や、経験だけでは認められない。物質的現象を経験する間に、此の如き力の存在を推測する心力は矢張、一種の直観である。

また、人間は、物質現象又は力の現象を経験する間に、これらの現象を不變的に貫通、支配するところのある事實の輪廓を認める事がある。例へば、吾々は水

の現象を種々に觀察し實驗する。この場合に、吾々の経験する所のものは何かといふに、それは單に流轉する水の現象に過ぎない。吾々は、経験そのものによつては、變化常なき現象以外に、何物をも認め得ないのである。然るに経験の途中に於て、吾々の心中に一種他の力が芽生える。それが吾々に、水なる現象の變化全體を通して一貫する處の、恒常的な、超感覺的事實——こゝでは水の性質——の存在せることを、漠然ながらも、氣付かしめる。此の心力が第三種の直観である。(超感覺的といふ意味は「感覺では認められない、即ち感覺を超越した所の」といふことである) 勿論この直観は経験をよそにしては起らないが、さればといつて、経験の内容又は附屬力ではない。経験あるも、直観の途に現はれずして止む場合もある。その場合に於ては、人間は、現象の變化を認めても、その現象を貫通、支配する超感覺的事實を認めることは出来ない。

以上によつて、直観と稱せらるゝ心力には三種類ある事が見られる。第一種及び第二種は、要するに力なる超感覺的現象の存在を認め、第三種は物質現象又は



かの現象を貫通、支配する一定不變の超感覺的事實の輪廓を認める。即ちその對象が全く異なるのである。故に吾々は説明の便宜上、第一種及び第二種を一括して直観Aと名づけ、第三種を直観Bと名づけやうと思ふ。

第五、理性(Vernunft)

是は事物を認める心力の最後のものである。人間は直観Bによつて、現象を貫通支配する所の一定不變の超感覺的事實をぼんやりと認める。その事實を更に正確に認める力が理性である。いかにして認むるか云ふに、それは、直観で認めた事實の輪廓を更に、明瞭且つ正確にする爲に、現象を経験的にしらべて、その上に批判的思考を加へるのである。その際必要な経験は、すべてつくされるし、又批判的思考(Kritisches Denken)は必要に応じて、比較、區別、分類、綜合、分解、歸納、演繹等の作用となつて、其の明確にせらるべき不變的事實、並に場合の如何に従つて、適當に用ひられる。

それ故に、理性とは、経験と、直観と、批判的思考との綜合によつて成れるか

である。

言ひ換へれば、智的心作用が未だ理性の境地に達せざる前に於ても、已に尙進んで最後の認識に到達せんとする道程に在れば、直観Bは、批判的思考を喚起し之に方向を示し、之を統一し、其の進展と共に進展し、また現象に直接的なる経験は、當然、直観B及び批判的思考の恒常的素地を形成し、それ等に所要の材料を提供し、陰に陽に前二者に随伴するものである。つまり、かゝる場合に於ては以上の三者は不可分の關係に在つて活動をつづけるものである。故に、智的心作用が最高地位たる理性に到達しても、直観B、経験、批判的思考の三者は、各此の理性の要素として、皆其中に融合實在するものである。

さて、是等の五心力が、いかなる程度に事物を認むるかに就て尙詳しく述べようと思ふ。

第一の感覺であるが、普通に人間は、感覺ほど慥かなものがないやうに考へてゐ



るが、實際は、人間は、感覺では、ある程度迄現象を認め得るけれども、決して正確に之を認めることは出来ない。感覺の中の視覺に例を取れば、心理學で説明して居るが如く、見る時により、見る人により、見る場所によつて、色彩に違つた感じを受け、又形の如きも、その周圍により、観る主體と客體の動靜關係によつて、錯覺の生ずることは既に學んだ所であらう。味覺、聽覺、嗅覺等、七感いづれにても正確には現象を認め得ない。

第二の意識は自分の心内の現在の現象を認めるのであるが、その心現象たるや始終進展して停滯しないから、之を把持して置くことはできない。即ち意識は、不變的のものを認むることはできないから、隨て事物を正確に認める力とは言ひ得ないのである。

直觀Aも、その作用の對象が、力といふ變化常なき現象である故、これを正確に認める事は當然出来ない。

經驗も亦、感覺、意識、直觀Aを延長し、または反覆する所の作用に外ならない

から、經驗それ自體としては、現象を正確に認めることは出来ない。

要之、人間が、感覺、意識、經驗、直觀A、の力で正確に事物を認められぬわけは、是等の力は現象を對象とし、而してそれ等の現象は恒常性を有せず、變化的のものであるからである。

然るに直觀B、もしくはは理性となると、その作用の對象は、變化常なき現象に非ず、その現象を貫通、支配してゐる所の一定不變の事實である。隨つて、その事實は關係してゐる所の各現象を普遍的、且つ必然的に貫通、支配するが故に、たとへ、現象を經驗するものが、時を異にし、環境を異にしても、常に同じ姿を、あらはすのである。

第十二講

感覺、意識、經驗、直觀Aではその認めんとする對象が、變化常なき故、隨つて



正確なる認知は出来得ないが、一定不變の事物を認知の對象とする直観B、または理性では、それが可能になることは、簡単に前に述べた所である。

然し、直観Bでは事實の輪廓を漠然と認め得るだけで、現象を貫通、支配する其の不變的事實が果して疑なく實在してゐるか否かは、更に進んで頭を働かせねば判からぬ。之が爲には必要に應じ適宜の實驗、觀察、を加へ且つ批判的思考をこらさねばならぬ。かく直観によつて得た一定不變と思はるゝ事實の研究上、經驗と批判的思考とを加へ、即ち人間の有つ智力の限りをつくして、終に正確なる事實に到着し得た心力が理性であるから、即ち、理性によつて始めて、現象を貫通、支配する不變の超感覺的事實を、明確に認めることができると言ひ得るのである。

理性の認識力が、かくの如く正確なる理由は、常にその對象が恒常性を有する事實である爲のみでなく、理性の内容を構成する直観、經驗、批判的思考の三力が、

一個の理性に綜合せられて働く場合は、個々別々の力として獨立に働く場合に比較して、遙に其の能率を高むるの理由があるからである。次に之を簡単に説明しやう。

經驗力は、現象を認むることが本務である。然もその本務を果す上に正確ではない。それが直観Bと思考と結合して、一定不變の超感覺的事實を認める場合には、其の認知力の現象に對する不正確は必ずしも障害とはならない。何となれば、經驗が、理性の一要素として、一定不變なる超感覺的のものに對する時は、其の作用の終局的對象は、現象そのものではなく、その現象を貫通、支配する處の一定不變の超感覺的事實であるから、その事實が有るか否か、若し有らば其正體はどうであるかを究め得る程度に於て、現象と交渉すればよいからである。

卑近の例を以てせば、「すべての生物は死ぬものである」といふことは、生物現象を貫通、支配して存する一定不變の超感覺的事實である。然るに人間は、種々の生物の死滅する現象を経験しても、勿論各現象を精細に、ありのままに、認めること



は出来ない。此事は前に述べた感覺及び經驗に關する説明により明かである。然るに、是等の各現象を貫通支配する所の「總ての生物は死ぬものである」といふ一定不變の超感覺的事實の存在は、此の各現象に對する正確の認知力なき經驗と直覺と批判的思考との共働によつて、之を認識するに差支ないのである。つまり經驗は、理性の一要素として働く場合は、正確なるものを認め得る力の一部を爲すのである。

直觀Bも、思考も、單獨では正確な働きをなし得ない。たゞ理性の一要素として經驗と相俟つて共に活動する時に於てのみ正確力の要素を形成するものである。

かく凡ての現象を貫通、支配する不變の超感覺的事實は、そのいかなる種類に屬するかを問はず、經驗、直觀、思考の三力の綜合たる理性の對象たらざるはない。數學上の公理、定理の如きも、之に洩れない。何となれば、是等の公理、定理は、時間と空間の絶對的に平等且無限であるてふ性質が根柢であつて、それ等の絶對的

に平等無限であるてふ事はまた、現象を貫通、支配する事實で、經驗と、直觀と、批判的思考の三力を綜合せる理性に依つて始めて明白にさるべきものだからである

要之、正確力なき三つの力の綜合が正確力ある理性を爲す。不思議のやうであるが、事實である。而してかゝる類例は自然界にも見られる。かの七種の有色光線が集つて一の無色光線を作るが如く、または數個の小磁石を接合せるものは、此の接合によつて成れる總磁石と同形同量の大磁石に比して遙かに大なる磁力を有するが如きはそれである。

吾々は以上に理性が、現象を貫通支配する恒常的なる超感覺的事實を、正確に認める心力であることを述べたが、然らば、それが果して客觀的に誤りなき絶對に正確なる事實を把握し得べきかどうか。若しそれができないとすれば、吾々が前に已定の事實の如く述べた所の一定不變の超感覺的事實の存在も非認められねばならぬ



譯である。何となれば、理性が絶対正確の認識力を持たないとすれば、よし宇宙間に一定不變の事實があつても、それが、人間に認めらるべき筈はないからである。

また、他方から觀れば、宇宙間に一の不變的事實なく、たゞ變轉してやまない所の現象あるのみだとすれば、事物を正確に認め得る心力も存在し得ない筈である。何となれば、此の如き心力の存在を證明すべき術がなくなるからである。

それ故、不變の事實の存在を證明しやうとすれば、理性の正確力を前提とせねばならぬし、理性の正確力を證明しやうとすれば、不變の事實の存在を前提とせねばならぬ。若し、兩者は俱に未定の事實で、新に證明を要する場合には、結局兩者共に證明不可能といふことになるわけである。

## 第十三講

理性が果して正確なりや、又恒常的事實が果して存在するや、此の兩者は一度に

決められねばならぬ。

吾々は此の難問に逢着して、彼のデカルトの言葉に思ひ當らざるを得ない。(デカルトは科學者で近世哲學の泰斗である)彼は、彼は學問が哲學的基礎を有せねばならぬとし、先づ自分の考が正しいか否かを疑ひ、遂に總てが疑はしくなり、最後に種々に疑つてゐる自分が此處に居るではないかと氣がつき、自分が今、現に考へてゐる、だから自分は存在してゐるのだ、といつて此の疑問を氷解した。

即ち、デカルトは總ての實在を疑つて見たけれども、自分の存在を疑ひ得なかつた。是が即ち、彼の實在論的哲學の出發點である、

こゝに於て、吾々は思ふのである。自分の存在を認めることは即ち、自分に對して外界があることを認めることである、何となれば自分以外のものがなければ、自分も在り得ないからである。

然らば此の、自分に對して外界があるといふことは、人間の如何なる力でわかる



か。自分といふものは意識や経験でわかり、外界の現象は、感覺や直観Aや経験でわかる。けれども自分に對して外界が、相對立してゐるといふ事實は、どうしてわかるか。此の如き事實は、決して一種の現象其のものではなく、現象を貫通支配してゐる事實である。隨て、それは現象を認める力たる所の感覺や、意識や、経験では認められないのである。

然らば即ち、此の如き事實を認むるものは、どうしても直観Bか、理性かでなければならぬ。結局、之を正確に認むるものは理性でなければならぬ筈である。

理性は其の要素たる所の經驗と、直観Bと、批判的思考とを以て、心内心外の現象をみて、そこに自己が存在し、その自己に對して外界が存在してゐるといふ不變的事實が、それ等の現象を貫通、支配してゐることを正確に認めるのである。

こゝで、吾々は、理性の正確力と恒常的事實の存在とを一度に肯定するの機會を得たのである。もし此の際に、吾々が此の理性の正確力を疑ふならば、自己の存在してゐることを疑はざるを得ない。自己の存在して居ることを疑ふならば、此處

に吾々は思考の出發點を失ひ、何物をも疑はねばならなくなる。然しながら吾々は自分の存在してゐることを疑ふ何等の根據をも有せぬ。無意識的の人間ならばいざ知らず、苟も意識的の人間は、必ず自己の存在を認めざるを得ない。意識的の人間とは要するに自己存在を認める人間といふことである。意識は、自己の心作用を認めてゐて、然してこの心作用の主體である自己なるものの存在を認めないと云ふことは出來ぬ筈である。其故に意識的の人間は當然、自己の存在を認め、同時に理性の正確力と恒常的事實の存在を肯定せざるを得ないのである。

## 第十四講

獨斷的と云ふ言葉は、證明的、論理的の語と對立してゐる。然らば、自己對外界の恒常的事實を、直観B、經驗、批判的思考の三力の綜合より成れる理性が認め得たといふ事實はいかにして之を證明するか。吾々は之を信じ得るのみであつて、之を證明することは出來ない。若し、證明し得られざるものが、すべて獨斷であるな



らば、吾々のこの信による二つの事實も亦獨斷であると云はねばならぬ。しかし、それが意識的人間の避くべからざるものとせば、此の二つの事實に對する信は意識的人間の本質を構成してゐる一要素であり意識的人間の出發點であるといはねばならぬ。故に、此の二者は證明を俟つべきものではない。即ち獨斷か、否かとの批評を超越せる實在であると見ねばならぬ。之を信じない者は、自己の存在をも疑ひ、絶對的懷疑に陥り、あらゆる方面に於て矛盾の生活を營まねばならぬ。

さきに吾々は、真理は不變的事實であることを述べて置いたが未だ具體的の性質は論じなかつた。然るに今、吾々は、理性によつて發見する所の現象を貫通、支配してゐる超感覺的なる不變の事實は、即ち始めに吾々が要求してゐた真理の條件を備へてゐることを見出すのである。こゝに、真理の形態が一層明瞭になつたと思ふ。即ち、真理は、現象を貫通、支配する一定不變の超感覺的事實である。所が、こゝに尙一つの問題を起すものがあるかも知れない。即ち、

理性も亦一種の精神的現象に外ならざるに拘らず、一定不變の事實に對する客觀的正確の認識力ある理由、換言すれば一の現象が客觀的の實在を正確に認め得る根據何れに在りやといふのである。

之に對して私は答へやうと思ふのである。

人間が、意識により、感覺により、又は經驗により、心内又は心外の現象を不正確ながら、或る程度まで認め得ることは事實であるけれども、結局、其の何故なるかの理由を説明することはできない。如何にしてといふことに關しては可なり細かな所まで解るけれども、最後に、何故にといふことになる、人間にはまだ解らないことばかり多いのである。一の現象たる理性が客觀的實在たる真理を正確に認め得ることも、やはり其の理由を説明し得ざる一種の事實として之を觀なければならぬのである。而して此の事實の存在を信ずることは、意識的人間の本質であり出發點でなければならぬ事は前に詳述した通りである。

それ故に、吾々は、理性をその主體たる人間の心作用として見るときは、それは



一の主觀的現象に過ぎないけれども、若し之を客觀的實在たる真理の正確なる認識者として見るときは、それは各個人の精神的現象を超越した超自然的な超主觀的な實在であるといふことができる。而して此の如き客觀的な超個人的な超自然的な實在の、現象に自然化され具體化されたものが、各個人の現實に具有する理性其のものであるといふことが出来るのである。

以上述べた真理と、所謂宗教上の真理との異なる所を明かにして置く必要があらう。何れの宗教でも、その教祖、開祖がたてた、教理、信條は、その宗教の信仰者だけには真理として通用する。しかし、信仰なき人には極めてつまらないものにも思はれる。即ち宗教上の真理は、一般的になることは出来ない。何故かとなれば、信仰といへばある事柄を心に思ひ浮べて、それが事實上在つてもなくとも、感情で有ると思ふ事だからである。たとへば埃及では猫に神通力ありとして之を神と信ずれば、そこに宗教的信仰が成り立つ如きである。

宗教上信仰する所の此の如き対象は何であるかといふに、それは、現象そのものには非ずして、現象に關するある事柄であることはいふまでもない。故に信者の此の如き対象、即ち宗教の教を思ひ浮べる心力は、現象を対象とする所の感覺や、意識や、經驗の如きものでなく、それは直觀か、理性か、又は想像の一でなければならぬ。

こゝに於て、信仰する事柄が果して實在なりや否やは、結局理性によつて検査されなければならぬといふことになるのである。もし理性で検査してその事實がないと正確にきまれば、即ち其の信仰は、ないものの上、築いたものなるが故に、迷信であるといはれねばならぬ。また、それが理性に検査されて、確かにあるときまれば、それに對する信仰は事實上あるものを信仰する故、眞の信仰と言ひ得る。

それ故に、いろいろの宗教に於て、宗教上の真理といはるゝものの中には、此の理性によつて肯定されるべきものと、否定されるべきものとあり得ると思ふ。

是より考へて見れば、所謂宗教上の真理は、吾々が今迄述べた真理とは必ずしも



一致しない。それ故に、吾々が此の講義に用ひる真理といふ言葉は、この宗教上の真理と區別されたものである。吾々は特に之を學の真理と名づけやう。

もし、この學の真理が疑はしいと云ふならば、それは世にいふ懷疑派の考へ方に墮ちたものである。懷疑派の人々は、人間には正確に事物を認知する力がないと云ふ。是は真理の存在は人間界にあり得ないといふことであり、結局自己の存在を否定することとなる。

或は、事物は相對的には之を正確に認め得らるゝも、絶對的には正確に認め得られないといふ。そして、真理は變化するものであると説く一派の懷疑論者は、人間が正確に現象を認め得ざる事實を指摘して、人間は眞理を認め得ずと主張する。これ、眞理の何たるかを知らず、現象と眞理とを混同して考ふる所から生ずる謬りである。

又他の一派は、眞理は單に、直觀、經驗、批判的思考の三力綜合より成る理性に

依てのみ、始めて正確に認め得らるべき事實たることに思ひ及ばない。不十分な經驗と粗笨な思考の結果によつて、得たる不正確なる事實を眞理と速断し、其の事實の維持せられざるを見て、眞理は相對的であるとか、進化するなどいふ誤つた結論を爲すに至るのである。

## 第十五講

此の如く懷疑派には種々硬軟の區別あるけれども、其の結論は、要するに、世には絶對の眞理なしといふことになる。けれどもそう言ふ結論だけは懷疑派にとつても一つの眞理であるといはねばならないから、その断定の中に絶對の眞理あることを肯定してゐることになる。即ち、彼等の主張そのものが自家撞着に陥つてゐると見られねばならぬ。

眞理は絶對的のものであつて、決して變ることもしなければ、消ゆることもないも



のである。例へば、水は酸素、水素の化合物であるといふことが一の真理であるが今後、たとひ人間がこの酸素、水素を分析して、各から更に新たな元素を発見しても水は水素、酸素の化合物なりといふ今の真理は變らない。已に認められた真理が嘘だといふことにはならない。即ち真理は増加しては行くが、不變であり、減びることはないのである。變更するものは真理でない。

今迄の説明は、自然現象に真理の例を取つたが、人事現象中にも真理はある。社交上の生活現象にも、政治現象にも、真理は存在するのである。苟くも現象のある所、必ずそれを貫通、支配する真理のあることを推測せざるを得ぬ。かく人事界に於ても真理あることは、聖哲と云はるゝ古人も直觀しつゝた。支那人の道の如きはそれである。もし人事現象に真理なしとせば、人間の生活といふものは、秩序を失はねばならない。是は、家族生活、國家生活に於ても瞭かなことである。

かの危険思想と稱されるものが、社會を亂す有害の思想であるといふ意味ならば

世の中に、真理の絶對性を否認する思想の如く、恐るべき危険思想はないのである。

アインシュタインが我國に來た頃には、真理は相對的であつて絶對的のものではない、といふ説が流行して、凡そ絶對を信するもの程、馬鹿らしいものはない、と言ふ者が多かつた。或る大學教授の如きは、絶對などといふ言葉は、學者の用ふべき言葉ではない、など、公言してゐた。甚だしい謬見である。

人事界に絶對なければ、學説はたて得られない。正邪善惡は、絶對的標準なくしては如何ともならぬ。

明治天皇の彼の五箇條の御誓文中に、「天地の公道に基くべし」と仰せられたのは絶對の真理を認められたからであり、教育勅語中に「之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず」と仰せられたのも、やはり其の爲めであると拜察する。



古の聖哲は、絶對的の眞理を、直觀的に認めた。それを理性によつて批判し、肯  
定し尙更に新な眞理を増加すべく努むることが、後世の學者の使命でなければなら  
ぬ。

種々の關係で遅れて申譯ありません。五輯までの原稿は出来てゐ  
ますから七月中に發送を終へる豫定ですが六、七、八輯は、どう  
しても八月に入つてからになります。  
休暇中届先を更へられたい方は御報知下さい。

第一輯 正誤表

十五頁	八行	爲し得ない者	誤	爲し能ふ者	正
三十七頁	十行	異端書		異端者	
四十二、三頁		對症療法		原因療法	

295  
171

大正十五年七月二十日印刷  
大正十五年七月二十三日發行

編輯者 佐々木良助  
發行所 秋田市中谷地町  
          秋田市橋山廣小路  
印刷所 はかりや印刷所  
          秋田縣防館學校  
          第一代用附屬小學校内

發行所 哲學パンフレット刊行會



終

